

## 小野ゼミに向いていない私と向いている私

第10期 栗原 さゆみ

大学2年生の時、入会するゼミについて、大して考えずに、真剣に勉強できるゼミ（自分が向いている向いていないに関係なく）に入会したいと思って小野ゼミを選んだ。入ってしばらくして自分がこのゼミに向いていないことに気づかされる。私には大きな欠点がある。それは、おっちょこちょいなことである。普通のおっちょこちょいであれば可愛いで済まされるが、自分でも嫌になるくらいおっちょこちょいである。さらに、パソコンが苦手。文章やメールでのタイプミスはもちろん、保存したつもりになっていることなんて多々あった。こんなおっちょこちょいな自分が、どれくらい、小野先生や小野ゼミの同期や先輩に迷惑をかけてきたことだろうか。だから、自分は小野ゼミに向いていないのだ。それでも、小野ゼミの人は私のミスを笑って許してくれた。落ち込む私を励まして一緒に作業を手伝ってくれた。時には、落ち込む私を飲み誘ってくれた。本当にみんな優しいのだ。本当に、このゼミのみんなには感謝してもしきれないと思っている。ありがとうございました。

一方、自分が唯一輝くことができたのが、ゼミ終わりに行く飲み会だった。高校時代は、部活の仲間と一緒にワイワイガヤガヤと騒ぎ、部活仲間をゲラゲラ笑わせていた私であったが、大学生になって、そうした大笑いをしたりさせたりする機会が減った。大学生は大人だから、大笑いとかお腹が痛くなるまで笑うことなんてないのだろうとどこか諦めていた。だが、小野ゼミの人と飲みに行くと、大笑いの連続だった。笑いすぎて、お腹が痛くなることなんて数えきれなかった。私も高校時代に培った笑いの技をもって、飲み会で笑いのネタを提供することに注力した。私のネタで、みんながゲラゲラ笑ってくれた時は、本当にうれしい。飲み会帰りに、終電を無くした先輩や同期が、一人暮らしをしていた私の家に泊まることもほぼ毎週であった。今思い出しても、すっごく楽しかった。6人ぐらいで1枚の布団に寝て、寝返りが打てない、寒い等文句を言いながらみんなで泊まった記憶はずっとこの先もいい思い出である。悩みも吹っ飛ばすくらい小野ゼミ生との飲み会やお泊り会は本当に楽しかった。

卒業エッセイにこんなことを書こうと、何度パソコンに向かっても、ゼミの事を思い出すと電車の中でもバスの中でも涙があふれて止まらなかった。私は、こんなにも向いていないと思っている小野ゼミが、いつの間にか大好きになっていた。いっぱい迷惑かけて、そのことでたくさん悩んだけれど、このゼミが好きなのだ。みんなともうグループワークすることも、一緒に徹夜をすることも、ゼミが終わった後に、三田で飲むこともできなくなるかと思うと悲しくなる。こんなに楽しいことも辛いことも、嬉しいことも悲しいことも経験できた2年間は、私の22年間の人生の中で、1番濃い思い出の1つである。